

氏名	遠藤正之
学位の種類	博士(文学)
報告番号	乙第342号
学位授与年月日	2018年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	カンボジアにおけるマレー人の活動 —16～19世紀を中心に—
審査委員	(主査) 上田 信 (立教大学大学院文学研究科教授) 弘末 雅士 (立教大学名誉教授) 鈴木 恒之 (東京女子大学名誉教授)

## I. 論文の内容と要旨

### (1) 論文の構成

題目：カンボジアにおけるマレー人の活動—16～19世紀を中心に—

序章

第1章 歴史的背景：カンボジアと海域世界—14世紀から17世紀前半まで—

第2章 カンボジア王ナック・チャン（在位1642～1658）のイスラーム改宗とマレー人の交易活動—VOCとの関係をとおして—

第3章 カンボジア・VOC間通商平和条約（1656年～1657年）—カンボジア王権とVOCの交易独占の試みをめぐって—

第4章 「1658年反乱」とその後のカンボジア・VOC関係—マレー人の役割—

第5章 18世紀から19世紀のカンボジアにおけるマレー人の活動—ネットワークの再編と「チャーム・チュヴィエ」の登場—

結論—まとめと展望—

### (2) 論文の内容要旨

本論文は、近世カンボジアにおいてマレー人が交易活動をとおして、カンボジア王権に少なからぬ影響力を行使したことを論じたものである。カンボジアは、ともすれば内陸農業国家ととらえられがちであるが、米をはじめ鹿皮、蘇木、漆、生糸、安息香などを東南アジアだけでなく周辺アジア地域に輸出した。見返りにインド綿布や銀、金属製品などをえた。本論文は、17世紀の東南アジアの経済活動に豊かな情報を提供するオランダ東インド会社の史料を活用して、周辺海域世界との交易をとおしてマレー人が、カンボジアで重要な勢力となったことを明らかにしている。

第1章は、カンボジアが海域世界と古くから交流があり、とりわけ16世紀以降その交流にマレー人が関与したことを論じる。第2章では、イスラームに改宗したカンボジア王ナック・チャンが、マレー人を積極的に活用し、マレー人をはじめ、オランダ人、華人、イギリス人、ポルトガル人などと幅広く交易したことが論じられる。第3章では、1640年代半ばにカンボジアとオランダ東インド会社のあいだで確執が生じたが、ナック・チャンはマレー人の仲介で交易関係を復活させ、オランダの独占取引の試みを巧みにかわし、カンボジア側に有利な取引を展開したことを明らかにする。また第4章では、広南阮氏の協力の下にナック・チャンを失脚させ、王位に就いたナック・ムントンが、当初華人を重用したが、海域世界と繋がりを持つマレー人を無視できず、結局彼らを復権させたことが示される。さらに第5章では、王朝年代記に登場する「チャーム・チュヴィエ（チャム人・マレー人）」の概念が、1692年の阮朝によるチャンパ王国占領後、少なからぬチャム人がカンボジアに移り、マレー人と混淆したため形成されたことを論じている。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文の特徴は、近世カンボジアにおけるマレー人とカンボジア王権との関係を、オランダ東インド会社の文書を活用して解明したところにある。これまで近世カンボジア史研究は、18世紀終り以降に王家が編纂した王朝年代記を主に用いて考察されてきた。しかし、王朝年代記は、王家にまつわる権力関係に語りが偏り、しかも伝承を基盤にしているため、17世紀および18世紀中ごろまでの出来事を考察するためには、厳密な史料批判が求められる。一方、17世紀のカンボジアの交易活動や政治経済的状况については、オランダ東インド会社が比較的豊かな史料を残している。本論文は、オランダ語史料を活用し、王朝年代記とも対比しつつ、カンボジアと海域世界の交流を明らかにしている。

それにより、ともすれば内陸農業国家としてとらえられがちな近世カンボジアが、諸外来勢力との交易に積極的に関わり、交易活動を王権の重要な基盤としていたことが明らかにされる。そうしたなかでマレー人が、カンボジアにおいて重要な勢力となった政治経済的背景が検討され、彼らが王権に対して少なからぬ影響力を行使したことを明示する。

### (2) 論文の評価

カンボジアと海域世界をつなぐマレー人の活動を、オランダ東インド会社文書も用いて明らかにしたことは、東南アジア史研究に新たな光を投げかける。ともすれば、ポスト・アンコール時代の近世カンボジアは、衰退期とみなされがちであるが、王家がマレー人や華人さらにポルトガル人やオランダ人と積極的に交易を展開し、王国を隆盛させたことを明らかにしたことは、高く評価される。またイスラームに改宗したカンボジア王ナック・チャンが、オランダの独占取引を認める条約を締結しながら、その試みを巧みにかわし、カンボジア側に有利な交易を展開したことを明らかにした点は、同様の条約をオランダと結んだ他地域と比較検討するための、興味深い材料を提供する。また、「チャーム・チュヴィエ」という新たな研究課題を提起したことは、高く評価される。

なお、マレー人の具体像をはっきりさせるために、マレー人がもたらしたインド綿布や現地住民のクメール人との関係についての検討が不足している。このような課題を残すが、これまで十分に活用されなかったオランダ語史料を用い、近世カンボジアと海域世界の交流史に新たな光を投げかけており、本審査委員会は本論文を学位に相当する優れた研究と認めた。